



『ロボット支援腹腔鏡下 前立腺全摘除術』開始

ふんわりまじか

手術ロボット「ダヴィンチ」が より繊細な手術を可能にします

市立砺波総合病院 泌尿器科

部長 江川 雅之

2017年7月より、前立腺癌に対する「ロボット支援腹腔鏡下前立腺全摘除術」を開始しました。手術用ロボットの導入は、県内では富山大学付属病院、富山県立中央病院について、3台目になります（全国では約250台）。

『前立腺癌』

前立腺は、膀胱と尿道の間に位置しており、精液の一部を産生する男性だけにある小さな（クルミ位の大きさ）臓器です。前立腺に発生する癌が前立腺癌であり、近年日本ではその罹患率が急激に上昇しています。国立がん研究センターによる癌罹患数予測（2016年推計）では、胃癌や肺癌を抜いて、男性癌の第1位となっています。

『前立腺全摘除術』

前立腺癌に対する全摘手術は、下腹部を15

cm程度切開して前立腺を切除する開腹手術が主に行われてきました。しかし、手術による体の負担（手術侵襲）が大きいため社会復帰に長い期間を要することや、大きな傷跡が残ることなどが欠点でした。

『腹腔鏡下前立腺全摘除術』

1997年に米国で最初に行われましたが、技術的困難性のため、限られた施設でのみ実施されてきました。当院で同手術を開始した2009年では、大都市を中心に全国47施設で行われているのみでした。下腹部に1cm程度の小さな穴を5カ所開け、そのうちの1つから腹腔鏡を挿入して、お腹の中をモニター画面に拡大して映し出します。残りの4つの穴から手術器具（鉗子）を挿入して手術を行います。写真①のように、真っ直ぐな鉗子を両手で直接操作して行います。侵襲の小



写真①

さい手術ですが、技術的に大変難しいため、熟練した腹腔鏡手術チームでのみ行われてきました。



写真②

『ロボット支援腹腔鏡下前立腺全摘除術』

今回導入した手術用ロボットは、手術がやりやすくなるよう手助けしてくれる装置です（写真②）。ボタン一つで自動的に手術が行われるわけではありません。手術の対象となる患者や手術の基本的な内容は、従来の腹腔鏡下前立腺全摘除術と同じです。しかし、3Dハイビジョンモニターで鮮明に拡大されたお腹の中の画像を見ながら、手振れせず自由に屈曲する（手首や指の関節が曲がるかのこと）鉗子を用いて手術ができるため、より繊細かつ安全な前立腺全摘除術が可能になります。前立腺全摘除術では、通常、副作用として尿失禁や性功能低下を認めます。しかし、手術用ロボットを用いることで、これらの副作用を軽減することが可能です。